広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第４号　2023　147－154

青年期における家庭展望の概念と研究方法の検討

― ライフキャリア理論からのアプローチ ―

渡　辺　朗　生
（2023年10月６日受理）

Research on the Concept and Research Methods
Related to Adolescents' Family Perspectives:
An Approach Using Life Career Theory

Tokinari Watanabe

Abstract: The purpose of this study was to examine the concepts, influencing factors, and research methods related to adolescents' perspectives on their future families through a review of previous research on their views of the future and to understand their life plans. One's outlook for the future is expressed by the concept of "time perspectives," and another purpose of this study was to clarify the state of adolescents' time perspectives and the factors that influence them. These, in turn, can be used to provide suggestions for educational support that promotes the development of time perspectives. A review of the research shows that there are still many issues to be addressed. For instance, we need to understand adolescents' time perspectives in greater detail by classifying them by focusing on plans for their future occupations, families, and other areas of life. In particular, since there is no previous research focused on the time perspectives of adolescents' family lives, there is a need to develop objective indicators to capture and classify these and to examine the factors related to them. The results of this study suggested the need to consider what kinds of career education are effective and necessary in secondary and higher education.

Key words: Family Perspectives, Life Career, Adolescents, Time Perspectives
キーワード：家庭展望，ライフキャリア，青年期，時間的展望

１．はじめに

近年，グローバル化やICT化による産業構造の大きな変化に伴って，社会，経済，環境に対する人々の考え方は多様化するとともに，人々は自己の生き方や人生における多様な選択肢を得ることができるようになりつつある（経済産業省，2022）。しかしその一方で，変化の激しい現代においては，自己の生き方や人生に対する漠然とした不安を抱える者も少なくないことから，人々が未来への見通しをもつことの重要性が増している（宮城，2022）。特に，青年期は自己の生き方を模索する時期であることから，職業や家庭生活，市民活動など，さまざまな生活領域に即した未来への見通しをもつことが重要である。そのなかでも，青年期は出生から成長を主に過ごしてきた定位家族からの自立と創設家族の形成との過渡期にあることから，青年にとって，未来の家庭生活に関する見通しをもつことも主要な発達課題の一つであるといえる。これまで，青年の職業選択に関わる未来の見通しに着目した研究が行われてきた（例えば田澤・梅崎，2019）一方で，青年の未来の家庭生活に関する見通しに着目した研究はほとんど行われてこなかった。

本論文は，査読付き論文である。

そこで本研究では，青年がもつ未来の家庭生活に関する見通し，すなわち未来の家庭展望に関わる概念や関連要因，研究方法を考察するとともに，青年の自律的なライフキャリアの形成に向けた示唆を得ることを目的とする。本研究では，青年期におけるキャリア発達に関する諸理論や時間的展望に関する先行研究のレビューを行い，未来の家庭展望の概念や研究方法について考察を行うこととした。なお，本研究では「職業や家庭生活，市民活動などのあらゆる生活領域において多様な選択肢をもつとともに，それらを主体的に選択することをとおして自分らしい生き方を実現していく過程」を「豊かなライフキャリアの形成」と表現することとした。

２．ライフキャリアと生涯発達

２－１　「人生100年時代」の到来とキャリア

医療技術の飛躍的発展や，AIやロボットなどの新しいテクノロジーの台頭によって，あらゆる人々にさらなる健康と長寿がもたらされている。我が国においては長寿化が顕著にみられ，「2007年に日本で生まれた子どもの半数は107歳よりも長く生きる」という Gratton & Scott（2016）の予測のもと，「人生100年時代」の到来が近づきつつあることが知られるようになった。これまでの社会においては，10～20歳代に教育を受け，20～60歳代には主に職業労働に従事し，60歳代に引退して老後の余暇を楽しむという，いわば単線的なキャリアモデルが存在した（Gratton & Scott，2016）。特に職業労働については，一般的に企業側が主導する受動的なキャリア形成が行われ，個人の視点からのキャリア形成は重視されてこなかった。森（2017）は，終身雇用制と年功序列制を広く採用してきた日本企業においては，企業が用意したレールに沿って一生懸命に働き，職位や経験を積み重ねることが求められてきた一方で，個人の目標を実現させるために自己のキャリアを考えることは求められてこなかった結果，個人のキャリアに対する意識は低いままであったことを指摘している。これまでのキャリア形成にかかわる研究は，主として職業労働に関する内容のみが着目されてきたことに加え，個人が主体的にキャリア形成を行う機会が限られていた一方で，キャリアにおける境界がなくなってきた現代（Arthur，2014）においては，例えば副業や転職，学び直しを何度も行うことで様々な職業を経験することができるようなワークキャリアの変化や，仕事だけではなく家庭生活やボランティアなどの社会的活動によるキャリアなどを視野に入れた，いわば複線型のキャリアプランを構築することが求められる。

誰もが，「長くなる人生において，自分らしい生き方をどのように実現するか」という問いに直面する昨今，それぞれの発達段階や環境変化に合わせたキャリアプランを構築したり，ライフイベント等に応じてそれを見直したりすることの重要性が増している（宮城，2022）。宮城は，個々の長い人生を展望したキャリアプランを構築しそのための具体的な行動に変化を与えるためには，人間の発達を肯定的にとらえること，すなわち「人間は死ぬその日まで生涯にわたり発達する存在である」という生涯発達の視点からキャリアをみつめることが重要となることを指摘している。すなわち，「人生100年時代」において自分らしい生き方を実現するためには，それぞれの発達段階や環境変化に応じて，長い人生を展望したキャリア意識の形成や長期的なキャリアプランを行うことが望ましいと思われる。

２－２　キャリアと青年期発達

これまでに行われてきた研究成果を概観すると，青年期において自律的なキャリアプランを行うことの重要性を示した研究が蓄積されている。青年期は，他者との関係性や人生における役割が多様に変化することに伴って，これまでの生活や自己の生き方，キャリアプランを模索する時期である。このような時期において，自分なりの生き方やキャリアを模索するとき，「自分とは何者であるか」というアイデンティティの問題にも直面する（浦上，2020）。アイデンティティやその獲得に関連する研究の嚆矢となっているのがエリクソン（1982）のアイデンティティ論である。エリクソンは人間の発達を乳児期から老年期までいくつかの段階に分類し，各段階における発達課題を示しているが，青年期においてはアイデンティティの獲得が重要な発達課題の一つであることを示している。この理論が示されて以降，アイデンティティに関するさまざまな定義や概念が提唱されているが，例えば谷・宮下（2004）はアイデンティティを，「自分が自分であるという一貫性をもち，過去・現在・未来にわたって時間的連続性をもっているという個別的で主観的な自分自身が，周囲の人々からみられている自分自身や社会的な関係の中での自分自身に合致しているという自信や安定感」と定義しており，時間的な流れと自己認識を関連させた定義づけを行っている。すなわち，青年期において自己の未来を想像し模索することは，青年期におけるアイデンティティの獲得及び発達に大きな影響を及ぼすといえる。

これまで，青年期全体にわたるキャリア形成が注目

されてきた。一方で，モラトリアム期間が延長し青年期の期間全体が延びている現代においては，青年期をさらにいくつかの段階に分類し，その分類ごとにキャリア形成の特徴やその意義を考察する必要があるだろう。宗方・鶴田（2022）は，青年期のキャリア形成について，高校生段階に該当する15～17歳ごろをキャリア探索の「暫定期」，大学生段階に該当する18～21歳ごろをキャリア探索の「移行期」，そして大学卒業後の22～25歳ごろをキャリア探索の「試行期」とする理論を提唱している。この第二段階にあたるキャリア探索の「移行期」，すなわち大学生の時期は，自己のキャリアについて「体験的にいろいろな角度から吟味する」期間であり，第一段階にあたる「暫定期」にくらべてより明確なキャリアプランを計画することをとおして，第三段階にあたる「試行期」において実際に計画を実行したり，キャリアプランを見直したりするために重要な時期であることを示している。

２－３　ライフキャリア理論の概念整理

「キャリア」という語はラテン語の carrus（=cart）や carerera（=road）等の語に由来するとされ，本来は馬車で道を進むことや競馬場のコースやトラックを意味するものであったが，これらの行為が「働くこと」や「仕事」の意味に転じたとされる（梅澤，2007）。現代における「キャリア」の語の一般的な使い方について島影（2010）は，①職務経歴として経験してきた職務の連続を意味する使い方，②仕事上での自己イメージやアイデンティティを意味する使い方，③生涯や一生といった人生そのものを意味する使い方の三つに分類している。これまで，主に労働市場からの要請を受け就職支援に特化したキャリア形成支援を行ってきた我が国においては，もっぱら①や②の意味としてキャリアをとらえてきたといえる。しかしながら，人生100年時代を生きていく若者においては，キャリアを人生や生き方，ひいては人生上の役割全般を含む包括的な概念としてとらえること，すなわち分類③の観点からキャリアをとらえる必要があるだろう（矢澤，2016）。「キャリア」に対するこのような考え方は Miller-Tiedeman & Tiedeman（1990）によって「ライフキャリア」という概念として提唱されているほか，ライフキャリアの概念やとらえ方に関する理論的な枠組みがさまざまな研究者によって提唱されている。

例えば，ライフキャリアに関する概念や枠組みの提案を試みた先駆的な研究者として，スーパー（Super, D, E.）が挙げられる。スーパーは生涯発達の視点からライフキャリアをとらえる「ライフキャリア・レインボー」の理論を構築した（Super, 1980）。ライフキャリア・レインボーはキャリア発達を時間軸の観点からとらえた「ライフ・スパン」と，役割軸の観点からとらえた「ライフ・スペース」の二つの次元によって構成される。「ライフ・スパン」は五つの発達段階と各段階に即した発達課題が示されたものであり，発達課題を乗り越えることによってキャリア発達が促されるとされる。スーパーはこの理論を提唱したのち，ライフキャリア・レインボーの趣旨をより明確にするとともに，個々人が実行可能なモデルを提供するためにライフキャリアのアーチ･モデルを構築した（図１）。アーチ・モデルには，左柱に個人の興味関心や価値観である思想・信条・個人特性が，右柱に人的，社会的資源等の社会環境とのかかわりが描かれており，左柱と右柱の相互作用をとおして自己のキャリア形成が促されることを明確に示したモデルとなっている。

人生やキャリア設計に対する包括的なアプローチを行う統合的ライフ・プランニング理論を提唱したハンセン（Hansen, L, S.）は，職業上の役割に加え家庭や社会における役割等，人生における様々な役割を盛り込んだ概念としてライフキャリアを提唱した（Hansen, 1997）。この理論において，人生における重要な課題として以下の六つの課題を示した。さらにハンセンは，人生上の役割として「四つの L」，すなわ

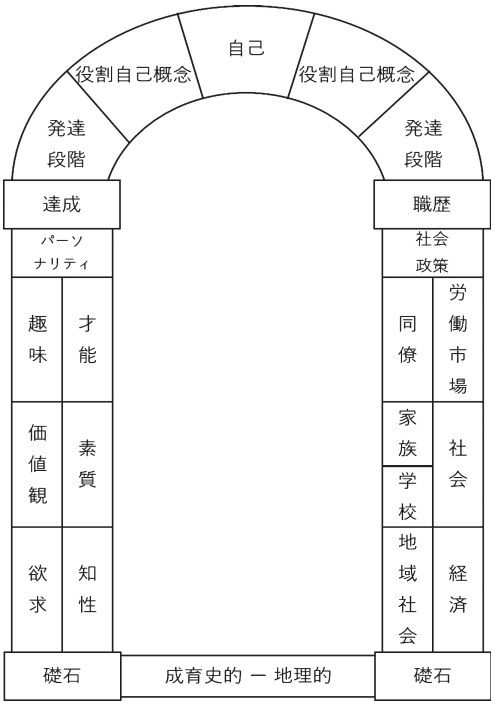

図１　ライフキャリアのアーチ・モデル
（Super（1990）；渡辺訳（2018）を基に筆者が作成）

ち「労働(Labor)」,「愛(Love)」,「学習(Learning)」,「余暇（Leisure)」を挙げ，これらの人生上の役割を統合することによってキャリアプランを明確化させることの重要性を示している。なお，二つ目のＬである「愛(Love)」は，キリスト教義に基づいた隣人愛を指すものであると思われる。我が国においては，地域住民等の身近な他者や直接的には関わりのない他者に対して「愛（Love)」という表現を用いることは極めて少ないことから，家庭や地域における「生活（Life)」に置き換えたうえで当該理論をとらえることも可能であると思われるが，いずれにせよ，各発達段階における諸課題を乗り越え，人生設計を包括的かつ積極的に行うために，家庭や地域における生活を含む多様な視点から人生上の役割を認識することが重要となる。上記の理論のほかに，自己，仕事，家庭に関する三つのサイクルからキャリアをとらえたシャイン（Schein, E, H., 1995)，他者との関係においてキャリアが形成されるとする「関係性アプローチ」の視点からキャリアをとらえたホール（Hall, D, T., 1996)，「持続可能なキャリア」という新たなキャリア概念を提唱したファン・デル・フェイデン（Van der Heijden, B. I. J. M, & De vos, A., 2015）などが，ライフキャリアに関する理論を提唱している。

さらに，近年ではライフキャリアの概念や枠組みの提唱と並行して，ライフキャリアの形成をどのように支援するか，すなわち充実したライフキャリアの形成を目的としたライフキャリア教育の提案が試みられている。例えば河﨑（2011）は，小学生から大学生までを対象として，ライフキャリア教育で育成すべき六つの能力領域（「自己理解」,「人間関係」,「生活実践」,「意思決定」,「就業機会」,「キャリア統合」）を措定したカリキュラムモデルを提示している。大学生段階をみてみると，例えば「意思決定」能力について，「家庭・地域・社会（職業）生活における生き方の方向性を選択し，大学卒業後の進路を決定する」といった記述のほか,「キャリア統合」能力について「自分の将来に向けた具体的計画を立て,必要な準備をする」,「人生における危機や転機について理解するとともに，対処方法を知る」などの記述がみられる。すなわち，ここではキャリア教育の目的として職業準備のために必要な能力にとどまらず，よりよく生きていくために必要な能力の育成を図る教育プログラムが提案されている。また，前田（2022）は従来の職業準備教育に偏ったキャリア教育を批判的にとらえ,「社会正義」,「ケアの倫理」,「自己省察」,「経験知」などの要素を組み込んだキャリア教育として，ライフキャリア教育の枠組みを提唱している。これまでの高等教育におけるキャリア教育は主に初年次教育の一環として位置づけられてきた（可知ほか，2023）一方で，この枠組みでは大学卒業後の進路を見据える三年次以降の学生をも対象として，職業，家庭，地域生活のいずれの生活領域においても活用できる実践知の育成を目的とした教育プログラムの構想が提案されている。今後，実証研究の成果にもとづいたライフキャリア教育の効果の検証やカリキュラムの体系化を目指した研究の進展が期待される。

３．青年のライフキャリアと時間的展望

３－１　青年期における未来の見通し

前節までに述べたように，青年が自分自身のライフキャリアを模索することの重要性が指摘されている一方で，社会全体においてめまぐるしい変化が起こっている現代においては，どのように未来への見通しをもてばよいのかわからない青年も少なくない。例えば，青年がもつ未来への見通しの実態を調査した京都大学・電通育英会（2016）によると，仕事や家庭生活等に関する未来への見通しを実現させるために,「何をすべきかはまだ分からない」と回答した大学生が51.7%にのぼる。このことに加え,未来の見通しをもっている青年であっても，その見通しがポジティブなものであるとは限らない。13～29歳の子ども及び青年の生活実態や意識について尋ねた調査（内閣府，2020）では，自分の将来に明るい希望をもっているかどうかについて，年代が上がるにつれて「希望がある」と回答する者の割合は小さくなり，20～24歳の層において「希望がある」と回答した者は20%を下回る結果であった。青年がもつポジティブもしくはネガティブな未来の見通しが青年のキャリア形成にどのような影響を及ぼすかについて，今後さらなる研究の進展が待たれるが，いずれにせよ青年期においては自己の未来に対して何らかの指標をもつことが重要であると考える。

３－２　青年の時間的展望に関する研究の現状と課題

青年が自己の未来に対する指標をもち，自律的にライフキャリアを形成するための方略の一つとして，青年が自己の過去・現在・未来を俯瞰したり，連続的なものとしてとらえたりして時間的な見通しをもつこと，すなわち時間的展望を獲得し発達させることが有効と思われる。小西（2019）はSuper，Savicas，Krumboltzらが提唱したキャリア理論における時間的展望の位置づけについて考察したうえで，時間的展望はキャリア概念に内包された概念であること，そし

て，個人がライフキャリアを形成することを考えるうえで，個人が感じる時間的展望の概念なくしてそれを理解することは困難であると結論づけている。そこで以下では，青年の自律的なライフキャリア形成に向けた示唆を得るために，青年の時間的展望に関する研究の現状と課題を考察する。

１）時間的展望の定義と類型

時間的展望とは，Lewin（1959; 猪俣訳1974）によって「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」と定義されている。我が国においては都筑（1999）が，時間的展望を「個人の心理学的な過去・現在・未来の相互連関過程から生み出されてくる，将来目標・計画への欲求，将来目標・計画の構造，および，過去・現在・未来に対する感情」と定義している。都筑は時間的展望の要素として時間的な一貫性，方向，内容などを挙げており，これらは時間的展望のいわば認知的な側面に着目しているといえる。また，時間的展望をとらえる尺度として，白井（1994）が開発した時間的展望体験尺度が挙げられる。この尺度は過去に対する「過去受容」，現在に対する「（現在の）充実感」，未来に対する「目標指向性」及び「希望」の四つの下位尺度から構成されている。これをふまえて白井（1996）は，時間的展望の構成要素として，時間の拡がり，密度，現実性，時間指向性，時間的知覚などを示している。近年では，例えば石井（2015）は時間的展望を，時間に対する感情的な側面である「時間的態度」と，主に認知的な側面である「時間的指向性」とに二分し，「時間的指向性」についてはさらに「時間意識」と「時間的連続性」の二つの下位概念に分類してとらえている。また，和田（2019）は時間的展望を，どのような構造や内容をもつのかという認知的側面と，時間的展望によって自己の有り様や感情，動機付けなどが影響を受けるという機能的側面に二分してとらえている。このように，時間的展望に関する統一した定義や概念が存在しない。しかしながら，時間的展望を，時間の広がりや内容などの認知的側面と，時間に対する態度や感情などから影響を受ける情緒的な側面の二つの側面からとらえる研究が多くみられる。今後は，自己の未来や過去に対する認知や感情を，いかにして現在における具体的な行動として具現化させるかについて，その心理的・行動的なメカニズムを明らかにする研究が必要であろう。

２）時間的展望への影響要因

前項で述べたように，時間的展望の構造や意味を多面的に明らかにしようとする研究成果は蓄積されてきたが，今後は，時間的展望の発達を促す心理的・教育的援助の方法を検討するために，青年の時間的展望の規定要因を探ることが重要となるだろう。青年の時間的展望への影響要因を検討した先行研究においては，とりわけ，個人の心理特性及び社会環境との関わりとの関連が多く示されている。特に時間的展望と個人の心理特性との関連については多数の先行研究があり，多様な解釈や考察が行われてきた。そのすべてを取り上げようとすれば枚挙にいとまがないが，例えば近年では，Kooji et al.（2018）が未来に関する時間的展望との関連要因について，これまでに行われてきた先行研究の成果をふまえたメタ分析を行った結果，未来展望と個人の勤勉性やポジティブ感情，自己効力感などの個人特性との間に強い関連がみられることを示している。また，社会環境への関わりとの関連を示した研究をみると，例えば時間的展望と家族や友人，教師といった「意味ある他者」との関わり（比嘉ほか，2005）をはじめ，地域選好や地域愛着（奥田ほか，2016）などとの関連があることが示されている。

３）時間的展望の発達

青年期を対象とした時間的展望研究の中には，時間的展望の獲得や発達に関する理論的，実践的な研究も散見できる。本来，Erikson（1959）が提唱した心理社会的発達課題には，青年期の発達課題である「自我同一性の獲得」の達成を規定する要因の一つとして，「時間的展望の獲得」が挙げられている。青年の「自我同一性の獲得」は，過去，現在，未来の時間的連続性の中での自己の継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであることから，青年期における時間的展望の獲得及び発達は，自我同一性の獲得において重要な役割をもつものである。また，Lewin（1951）は，児童期から青年期に移行する中で，子どもの時間的展望が拡大するとともに，現実と空想の分化が促されることによって，青年は自分が置かれた現在の状況をよりリアルに，より客観的に捉えることができるようになると指摘している。近年では，青年の未来への見通しをどのように伸ばすか，すなわち時間的展望の発達をどのように促すかについての研究成果が蓄積されつつある。例えば園田（2011）は，自己の特徴を視覚的に認識しながら過去・現在・未来にわたる自己のライフストーリーを作成する展望地図法を開発し，展望地図の作成をとおして時間的展望の発達が促されることを示唆している。

以上のように，これまで青年期における時間的展望の発達に関する理論的な研究が進められてきたことに加え，近年では青年の時間的展望をさまざまな研究アプローチを用いて可視化し，青年が自身の過去・現在・未来をどう関連させているか，また，そのことによって時間的展望がどのように発達するかを明らかにする

ことを目的とした実証研究や，時間的展望の発達を促す教育支援の実践的な研究が蓄積されつつある。

４）家庭生活に関する時間的展望研究の必要性

これまでに行われてきた青年期における時間的展望に関する研究成果を，先のハンセンが示した人生上の役割，すなわち学業，職業労働，愛（ここでは家庭生活），余暇の四つに分類してみると，もっぱら学業に関するものや，職業労働やその選択に関するもの，すなわち職業展望に焦点をあてた研究の成果が蓄積されてきた。しかしながら，青年期は出生から成長を主に過ごしてきた定位家族からの自立と，自分の意志による創設家族の形成との過渡的な位置にある（五十嵐，1989）ことから，家庭形成に向けての準備も青年期の主要な発達課題であり，自律的なライフキャリアの形成を促すためには，学業に関する時間的展望や職業展望に加え，家庭生活に関する時間的展望をもつことが欠かせないだろう。青年が未来の家庭形成をどのように捉えているのか，すなわちどのような家庭展望をもっているのかを多側面から明らかにするとともに，その発達の様相を明らかにする必要がある。

４．青年の未来の家庭展望をとらえる研究方法の検討

これまでに行われてきた時間的展望研究の成果を概観すると，家庭生活に関する時間的展望の実態やその影響要因に焦点をあてた研究はほとんど行われていない現状にある。そこで，本節では青年期における未来の家庭展望の実態を多角的にとらえる研究を行うにあたって，その研究方法を検討する。なお，本研究では「個人の過去・現在・未来を相互に関連させることで創発される，未来の家庭生活形成に対する認知及び感情」を未来の家庭展望と定義する。

１）未来の家庭展望をとらえる指標の開発と類型化

まず，青年期における未来の家庭展望の実態をとらえ，その構造を明らかにすることができる指標の開発が求められる。未来の家庭展望の構成要素について，先の時間的展望研究に関する尺度開発や類型化を試みた先行研究のうち都筑(1999)，石井(2015)，和田(2019)などの枠組みを援用すれば，未来の家庭展望は，未来の家庭生活の内容や広がりからなる認知的な側面と，自己の未来の家庭生活に対する感情や動機付けからなる情緒的な側面に二分することができる。認知的側面の構成要素としては，例えば，未来の家庭生活に関するイメージの明確さを問う「見通しの明確性」や，過去や現在の家庭生活に対して未来の家庭生活のことをどの程度重要視しているかといった「未来への指向性」が想定される。また白井（1994）の尺度では，目標志向性を測る項目として，将来のために準備していることがあるかどうかを問う項目が存在するように，未来の家庭生活を豊かなものにするために現在行っている準備も，未来の家庭展望の認知的側面を構成する要素のひとつといえるだろう。他方，情緒的側面の構成要素としては，未来の家庭生活をポジティブにとらえ自らの力で切り開こうとする「希望・自信」や，未来の家庭生活を豊かにするための計画や目標をみつけようとする「渇望」が挙げられる。以上のように，未来の家庭展望を認知的な側面と情緒的な側面の二つの視点からとらえる尺度を開発することによって，青年の未来の家庭展望の実態を多面的に明らかにすることができるのではないだろうか。

２）未来の家庭展望の関連要因に関する検討

次に，未来の家庭展望の関連要因について検討する必要があるだろう。筆者は先行研究において，大学生の親との関係及びこれまでの生活経験が，家族や生活に関する個人の観念や基準である家族観及び生活観を媒介して大学生の未来の家庭展望に影響を及ぼすことを明らかにした（渡辺・今川，2021）。しかし当該研究の課題として，未来の家庭展望を問う質問項目の尺度化が必要であることと，各質問項目の見直しの必要性も挙げている。さらに，職業展望や家庭展望を含む時間的展望が個人のライフキャリアの形成に影響を与えることを示唆する先行研究を引きながら，当該研究ではそのことを実証的に明らかにするには至らなかった。今後，未来の家庭展望が青年のライフキャリアの形成にどのように作用するかを引き続き明らかにしていく必要があり，その研究の意義は大きいと考えている。そこで，先行研究（渡辺・今川，2021）の成果及びその考察をもとに，筆者は，未来の家庭展望の発達を軸としたライフキャリア形成モデル（図２）を試案した。このモデルを研究枠組みに援用した体系的な家庭展望研究を蓄積することで，青年のライフキャリア形成に関する研究を家庭生活の側面からとらえることが可能となるだろう。

３）未来の家庭展望の発達を軸としたライフキャリア教育の可能性に関する検討

青年期における，未来の家庭展望の発達を促す教育的支援の方法とその効果について検討することも重要である。先に述べたように，青年の時間的展望の発達を促す教育的支援の方法を考察する研究や，大学等において単発の講義をおこなったうえでその効果を検討した研究は散見できる。しかし，時間的展望を職業展望や家庭展望等の生活領域に着目して細分化してとらえようとする研究はみられず，結果として時間的展望

の発達を促す系統的な教育プログラム等の開発にはいたっていない現状にある。上述のとおり，時間的展望やその構成要素である家庭展望の発達が，青年のライフキャリアの形成に影響を与えるとする示唆にかんがみれば，近年行われているライフキャリア教育の充実が未来の家庭展望の発達を促すための一助となると考えられる。具体的には，未来の家庭展望を発達させる体系的なライフキャリア教育プログラムを開発し，大学で教養教育として実施されるキャリア関連科目や，家政学に関連する教養科目，または専門科目において開発したプログラムを活用することが有効であると考える。

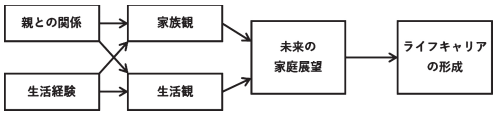

**図２　家庭展望の発達を軸とした
ライフキャリア形成モデル**

５．まとめ

近い未来に到来する「人生100年時代」においては，これまでの職業生活に関するキャリアの見通しをもつだけではなく，未来の家庭生活や市民生活，余暇などの幅広い生活領域を視野にいれたライフキャリアを形成する必要がある。特に青年期におけるライフキャリアの形成が重要視される一方で，未来の見通しをもつことができない青年も少なくない。未来の見通しやそれに対する感情は時間的展望という概念で示され，青年の時間的展望の実態や関連要因のほか，時間的展望の発達を促す教育的支援などが検討されるようになっている一方で研究の課題も残されている。例えば，時間的展望を職業展望や家庭展望等の生活領域に着目して分類し，青年の時間的展望をより精緻にとらえることが求められるだろう。とりわけ，青年の家庭生活に関わる時間的展望に着目した研究はみられないことから，未来の家庭展望をとらえる客観的指標の開発と類型化や関連要因の検討，さらには未来の家庭展望の発達を促すライフキャリア教育の可能性に関する検討を行うことで，青年の未来の家庭展望について多面的にとらえることが望まれる。

【引用・参考文献】

Arthur, N.（2014）. Social justice and career guidance in the Age of Talent. International Journal for Educational and Vocational Guidance. Vol. 14, 47-60.

Erikson, E, H.（1959）. Identity and the life cycle（Psychological issues Vol.1）. New York: International Universities Press.（西平直・中島由恵（2011）. アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.）

Erikson, E. H.（1982）. The life cycle completed. New York：Norton & Company.（村瀬孝雄・近藤邦夫訳（1989）. ライフサイクル－その完結－みすず書房）.

Gratton, L. and Scott, A.（2016）. The 100-Year Life : Living and Working in an Age of Longevity. Bloomsbury Information Ltd.（池村千秋（2016）. ライフシフト 100年時代の人生戦略. 東洋経済新報社.）

Hall, D, T.（1996）. The Career is Dead － Long Live the Career. A Relational Approach to Careers.（尾川丈一，梶原誠，藤井博，宮内正臣監訳（2017）. プロティアン・キャリア－生涯を通じて生き続けるキャリア－キャリアへの関係性のアプローチ. プロセスコンサルテーション.）

Hansen, L. S.（1997）. INTEGRATIVE LIFE PLANNING：Critical Tasks for Career Development and Changing Life Patterns, CA: Jossey-Bass.（平木典子・今野能志・平和俊・横山哲夫監訳（2013）. キャリア開発と統合的ライフ・プランニング　不確実な今を生きる６つの重要課題. 福村出版.）

比嘉麻美子，高良美樹，岡本祐子（2005）.「意味ある他者」の存在と大学生の未来展望との関連. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要. No.4, 78-89.

五十嵐敦（1989）. 青年期の家族展望－家族についての時間的展望－. 思春期・青年期問題と家族. 家族心理学年報7. 日本家族心理学会編. 金子書房. 197-216.

石井僚（2015）. 時間的連続性尺度の作成. 青年心理学研究. Vol.27, 39-47.

河﨑智恵（2011）. ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成. キャリア教育研究. Vol.29, No.2, 57-69.

小西琴絵（2019）. 主体的キャリアと時間展望概念の関係性の検討. 東海学園大学紀要. No.24, 1-14.

Kooij, D. T. A. M., Kanfer, R., Betts, M., & Rudolph, C. W.（2018）. Future time perspective: A systematic review and meta-analysis, Journal of

Applied Psychology, Vol. 103, No.8, 867-93.
京都大学，電通育英会（2016）．大学生のキャリア意識調査．43-44.
Lewin, K.（1951）．Field theory in social conflict: selected papers on group dynamics. New York: Harper.（猪股佐登留（1974）．社会科学における場の理論［増補版］．誠信書房.）
前田信彦（2022）．ライフキャリア教育の探究．キャリア教育と社会正義：ライフキャリア教育の探究．勁草書房．208-216.
Miller-Tiedeman & Tiedeman（1990）．Career decisionmaking: An individualistic perspective. In D. Brown, L. Brooks & Associates (Eds.), Career Choice and Development. (2nd ed., pp. 308-337). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
宮城まり子（2022）．人生100年時代の発達心理．キャリア・カウンセリング エッセンシャルズ400．日本キャリア・カウンセリング学会監修．p.21.
森樹男（2017）．経営学教育とキャリア形成．菅原良，松下慶太，木村拓也，渡部昌平，神崎秀嗣編．キャリア形成支援の方法論と実践．東北大学出版．127-141.
宗方比佐子, 鶴田美保子（2022）．大学生のための「キャリア開発の教科書」．ミネルヴァ書房．p.25.
内閣府（2020）．子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）．115-122.
奥田雄一郎，阿部廣二，三井里恵（2016）．大学生の地域愛着と時間的展望. 共愛学園前橋国際大学論集. No.16，157-164.
Schein, E.H.（1995）．Career Survival: Strategic Job and Role Planning.（金井壽宏訳（2003）．キャリア・サバイバル．白桃書房.）
島影義和（2010）．大学におけるキャリア形成支援の進め方と課題．流通経済大学社会学部論叢．Vol.20, No.2, 55-69.
白井利明（1994）．時間的展望体験尺度の作成に関する研究．心理学研究．Vol.65, No.1, 54-60.
白井利明（1996）．日本の女子青年の時間知覚における Cottle の仮説の検討－サークル・テストとライン・テストの結果から－．大阪教育大学紀要第 IV 部門，Vol.44, No.2, 209-218.
園田直子（2011）．時間的展望を形成する方法としての「展望地図法」の開発とその効果の検討．久留米大学心理学研究，No.10，22-30.
Super, D. E.（1990）．A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development. Journal of Vocational Behavior, Vol.16, 282-298.（渡辺美枝子編著（2018）．新版キャリアの心理学［第2版］－キャリア支援への発達的アプローチ．ナカニシヤ出版.）
谷冬彦，宮下一博（2004）．さまよえる青少年の心－アイデンティティの病理 発達臨床心理学的考察（シリーズ 荒れる青少年の心）．北大路書房.
梅澤正（2007）. 大学におけるキャリア教育のこれから．学文社.
Van der Heijden, B. I. J. M., & De Vos, A.（2015）．Sustainable Careers: Introductory Chapter. In B. I. J. M. Van der Heijden & A. De Vos (eds.), Handbook of Research on Sustainable Careers. 1-19, Cheltenham, UK: Edward Elgar Publishing.
和田万紀（2019）．時間的展望と精神的健康：過去，現在，未来から立ち現れる「現在の拡がり」．桜文論叢 No.100, 1-22.
渡辺朗生，今川真治（2021）．親との関係及びこれまでの生活経験が大学生の未来の家庭展望に及ぼす影響－家族観，生活観を媒介して－．日本家政学会誌．Vol.72, No.12, 776-788.
矢澤美香子（2016）．社会人のためのキャリア・デザイン入門．金剛出版.

（主指導教員　今川真治）